

岡山城跡本丸 次発掘調査現地説明会資料

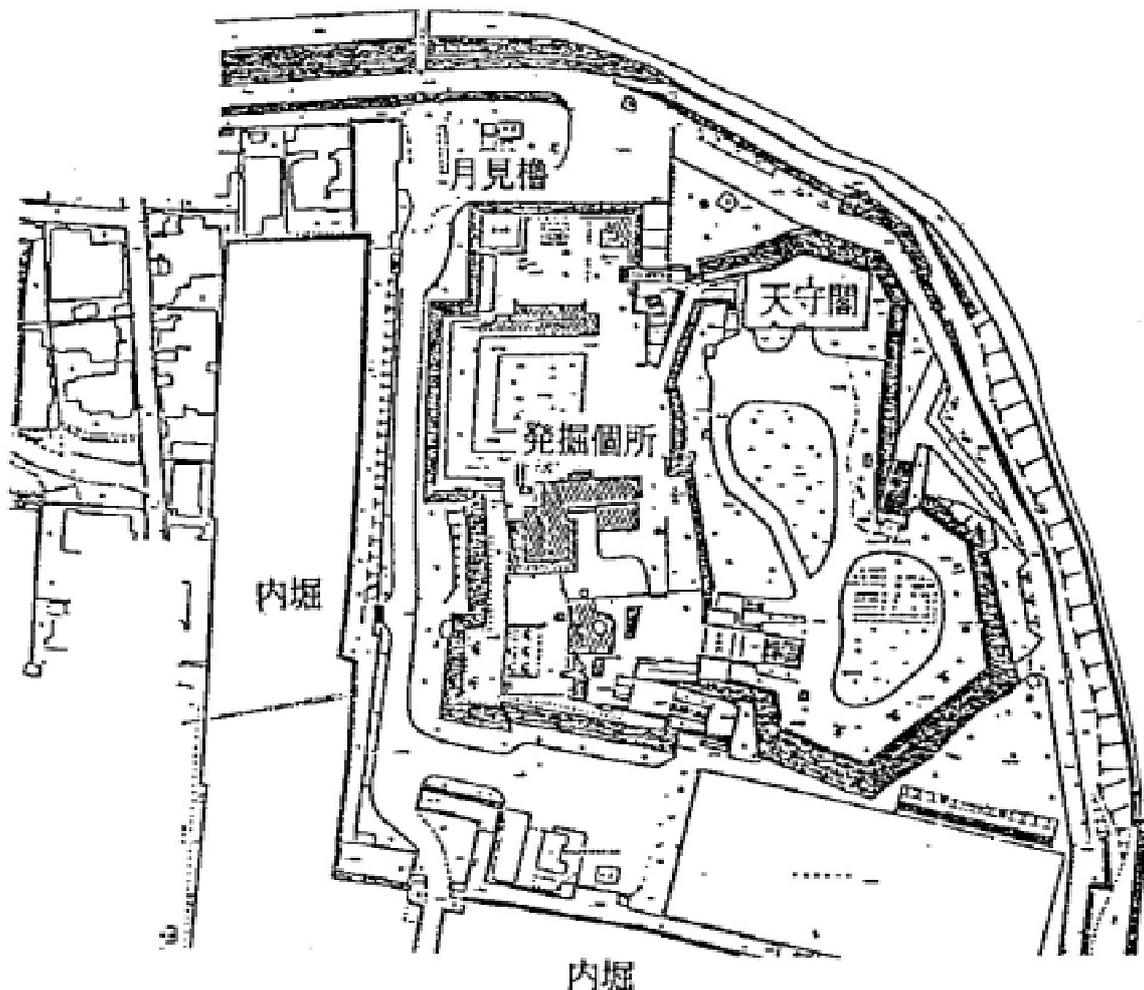
1996.3.16

岡山市教育委員会

1 はじめに

岡山城跡の本丸一帯は、烏城公園として復元天守閣と共に、広く市民に親しまれていますが、1987年に国の「史跡」に指定されたのをうけて、遺跡としての観点からの整備・公開をめざす事になりました。その第一歩として、まず地下の遺構の有無や内容を把握する必要があります。このため、1992年から順次、発掘調査を行なってきました。今回の発掘はその最終年度分として、昨年の11月に始めました。

発掘を行っている場所は、天守閣のある本段から西に一段下がった中段と呼ばれる場所で、その北西端には本丸で唯一の現存建物である月見櫓があります。天守閣のある本段には大名池田家の私の御殿があったのに対し、中段には、表書院と呼ばれた藩の政治や儀式を行うための公の御殿が建っていました。今年度は、コンクリート建物があったその中央部を中心に発掘しています。確認された遺構は、月見櫓などが建てられた江戸前期よりも後の地盤面に伴う上層遺構と、それより深い層でみつかって江戸時代前期を遡る石垣や建物跡などの下層遺構に大別されます。



2 上層遺構(江戸前期から幕末)

表書院や月見櫓を除く櫓・門は、明治維新の時に取り壊され、その後、岡山第一中学の校舎やコンクリート建物が建てられたため、既にその痕跡が損われた部分も多いのですが、明治維新以後、そのつど地上げをしてこの地を利用した事から、当時の地盤や下部構造がそのまま埋め込まれて残っている部分も各所で確認できます。

江戸時代中期初めの元禄年間以降の様子は、岡山大学池田家文庫などにある絵図から窺い知ることができます。これによると、表書院は数棟からなる主妻建物が一体化したもので、延数にして 850 畳敷きの大御殿です。北側には、最も格式の高い招雲閣と呼ばれる棟、池・能舞台・茶室を備えた中庭、台所などがあります。南半部は、表向きに当たり、本段に上がる不明門前の広場・玄関や梅の間と呼ばれた 36 畳敷の大広間を持つ棟などがあります。

昨年度までの発掘では、絵図と良く一致する配置や内容で様々な遺構が確認されましたが、今年度は、中央部西寄りでは表書院南西の棟の礎石配列、東の本段石垣に沿う便所跡などが確認されています。また中段の北東隅では小納戸櫓の礎石列が残っていました。小納戸櫓は月見櫓より一回り小さな櫓で、豊島石をくり貫いて作られた配水溝などを伴っています。

昨年度までの調査成果も含め、具体的な「もの」として表書院の時代の遺構が広がりをもって検出できたことから、絵図の信ぴょう性を確認するだけでなく、絵図に表現されていない部分を補足したり、逆に絵図に示された建物などの配置を現地に投影することが可能となりました。

3 下層遺構(江戸前期以前)

表書院が建つ地盤ができ上がった 1620 年代後半頃より古い層で見付かったもので、実際は数時期からなるものを一括して呼んでいます。この時代の絵図はありませんから、発掘によって始めて明らかになった内容と言えます。上層遺構が約 250 年もの長い間、ほぼ同じ地盤面(一部では 2 面)で同じ様な建物構造が持続したのに対し、それ以前はほんの 40 年間足らずにもかかわらず、城の改造が頻繁に行われたことが分かってきました。石垣や地盤面それに建造物の建設と破却が繰り返されたのです。基本的には、前の地盤面を次の時期には埋めたてる方向に動きますので、発掘をして行くと、異なる時期の遺構が同じ場所で重層的に見つかる訳です。

上の遺構の保存を図りながらの調査であるため、調査区内であっても下層遺構総てについて掘り下げができないことや、古い時代での破壊、またそれ自体の構造の複雑さに阻まれて、未確定な点も多いのですが、昨年度までの成果とも合わせて、中段の変遷過程がかなり明らかになってきました。特に今年は、現在の中段西辺を画する現役の高石垣から 12m の内側での埋没高石垣の発見から、中段の拡幅が 2 度あった事が分かるなど大きな進展がありました。以下、その変遷を時代を追って見ていきましょう。

期

中央部の最深の位置では花崗岩風化土からなる地山が確認され、本丸一帯が本来あった自然の丘を巧みに利用していることが分かります。その丘が高い部分を芯として、低

い部分に土を入れて平坦部を造成、この縁には内側での高さが 1m 以上、幅 6m ほどの土塁を弧状に廻らしています。内側平坦地の地表に当たる層には室町時代後半から安土桃山時代の備前焼・それに少量の瓦などが伴い、昨年調査では、建物の礎石とみられる配石も確認されています。これは次の 期のような本格的な高石垣や瓦葺建物群を伴っていませんが、軍事的な施設の一部とみられます。すなわち、ここに岡山城本丸が築かれる以前、西方約 200 m の石山に城の中心があった頃の出城的なものと考えられます。石山の軍事的な防御を考えると、この丘は重要に違いなく、在ってしかるべきものですが、宇喜多秀家による本丸普請 = 狭義の岡山城築城以前に、城としての営みが既に始まっていた事が、実体として確認されたことは重要です。

期

本格的な高石垣や多数の瓦葺建物など、近世城郭の体裁を持つ最古の段階で、1597 年と伝わる天守閣竣工を含む、宇喜多秀家による本丸普請時とみられるものです。多量の普通瓦に混じって、金箔瓦なども伴い、次の 期に至る改造工事の際、地中に埋め込まれています。金箔瓦は宇喜多期ご特徴的なもので、秀家と秀吉の親密な関係を前提とするものと言えます。金箔押しは瓦の内でも鬼瓦など極一部に限られますが、今年度は桐文鬼瓦や天守閣と共通する特殊な軒平瓦などが出土しています。桐文も秀吉の身内として秀家が使用を許されたものとみられ、金箔は押していませんが、桐文の軒丸瓦も伴っています。さて、中段の西を画する高岩垣は、今回新たに確認されたもので、大きさや形が揃っていない花崗岩の巨石を加工せずに積んだ野面積みで、後に築かれる石垣より法の傾斜が緩いのが特徴です。高石垣から 4m 程内側には背中あわせに平行して高さ 2m 足らずの低石垣があります。内外の石垣に挟まれた頂部には、塀か多聞櫓があったに違いないのですが、実物としての痕跡は残っていません。内石垣の内側では、内石垣に沿う細長い建物、また段中央部にあって御殿ともみられる建物の礎石列が確認されました。西側高石垣は北側高石垣に鈍角を成して繋がります。北側高石垣は既に一昨年調査で確認し、その東には中段に上るための裏門が確認されています。高石垣の南への延長は未確定ですが、この時期の中段は最後の V 期、つまり今見る広がりには比して半分程度の面積しかなかった事になります。

期

先の西側の高石垣が破却また埋め込まれて、中段が主に西に拡幅、V 期に比べ三分の二程度の面積になります。北寄りでは 期の高石垣と内石垣が完全には埋まり切らず、背中合わせの低石垣として露出していた様です。西側と南側の高石垣に平行して、やはり内側を向く低石垣があり、その延長は大納戸櫓の櫓台の内部に埋め込まれている事が昨年確認されていますから、明治維新まで建っていた姿での大納戸櫓の建築構造は、未だ出来てはいません。大納戸櫓は、中段の南西端にあって天守閣に次ぐ規模の三層櫓で、1600 年の関ヶ原の合戦の後に城主となった小早川秀秋が建てたと伝えられてきた櫓です。この大納戸櫓部と特に南にかけての現役高石垣は、この 期の構造が原形に違いないのですが、そのものとするよりは、次の 期に少なくとも上部が積み直された結果とみられます。一方、北側の高石垣は 期ものを続けて使い、 期の北西角にあたる今年度の調査区では、西側に新たに石を積んでそのままの直練で石垣を継ぎ足した状況が

見事に観察されます。中段の内部は、北半分が低石垣で画されて高くなり、ここで礎石建物などが確認されます。次の 期に至る改造工事の埋土に入った多量の瓦の内には少量の金箔瓦が含まれており、 期にも金箔瓦を掲げた建物があった事が分かります。

こうした 期の掃属年代については、にわかには決し難いのが現状です。 期に続くと言う意味では小早川期とするのが自然で、そうすれば金箔瓦は宇喜多期のものを流用したという解釈、また大納戸櫓は小早川が建てたと言う伝承は否定される事になります。しかし、金箔瓦の存在や大納戸櫓建設伝承を重視し、戦国時代という軍事的背景を考えれば 期も宇喜多期とする可能性もあながち否定し切れない訳です。

期

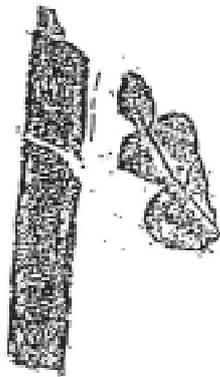
期との間に、中段の大きな拡幅はありませんが、西と南の高石垣に沿う内石垣が外側に押し出された格好で後退し、段内が微妙に広がります。大納戸櫓の東壁が乗る城内側石垣もでき上がり、一帯の外石垣も確実に現役の姿になります。中段内は、やはり北半が高く、建物があった様ですが礎石などは V 期に至る工事での改変を披って遺構の上では不明確で、浅溝やごみ穴などが確認されるのみです。この時点では ・ 期の地盤が既に数十センチ埋められ、 ・ 期に構築された石垣の多くは地下に埋没しています。特に北側の高石垣の背後では、平行する低石垣による段差はなくなってしまいます。なお、各石垣の石材は、この段階までが、野面石を用いています。

期

中段が北に大きく拡幅され、もはや I 期の高石垣は総てが埋没し、まったく見えなくなってしまいます。古い拡幅ほど地盤が高い場所を基盤とし、獲得面積あたりの盛土量はまだ少なく済んだのですが、この拡幅は相当な厚さの盛土を要しています。この工事によって、中段はようやく今見る姿に完成し、表書院や月見櫓などの上層遺構が展開します。1620 年代後半ごろの池田忠雄によるとみてまず間違いないでしょう。新たに構築された高石垣は、形や大きさが揃った割石材を多用する事から、石垣面に見える詰石は少なく、傾斜がかなり強い石垣となっています。背後には内石垣が付随する部分と、徳川期の大坂城などと共通する石造の銃眼が施される部分があります。 期から段内であった部分もさらに地上げされ、一段低かった南半部もその西側は表書院などが建つ地盤と同じ高さに揃えられます。平滑な表面を持つ低石垣で区切られた、不明門前ないしは表書院玄関前の狭い範囲のみが、段差を持って低くなるのです。

以上を大局的にみれば、古い時代は、中段が狭く、各所に低石垣が複雑にあって軍事的防御への配慮が色濃く(但しこれは 期がピークか)、段内側での建物が建つ空間が狭かったのに対し、しだいに中段そのものが拡幅、段内の起伏も平坦化され、表書院の成立を到達点に御殿(非軍事的)空間が広く取れる方向に進んだと言えます。これは、下層の時期が未だ戦国時代という背景から、古くは軍事優先であったのに対し、徳川政権の安定化に伴い、政治を行なう場所としての側面が強まった結果と考えられます。また、改造の多さ自体は、下層の時代にこそ、日進月歩で築城技術が進んだ上、軍事的に独自のポリシーを持ち得る城主の系統が目まぐるしく変わった事にも関わるとでしょう。なお、徳川幕府の安定化とともに、城の改造は制度的にも厳しい管理下におかれます。

宇喜多秀家期の瓦



桐文鬼瓦 (金箔)



板状の鬼瓦 (金箔)

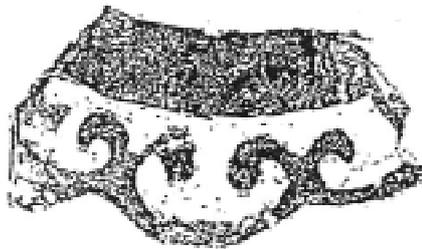


板状の鬼瓦 (金箔)

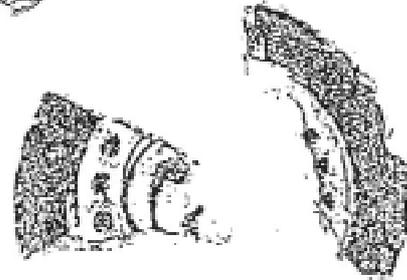


板状の鬼瓦 (金箔)

鬼瓦類の一部 (金箔)



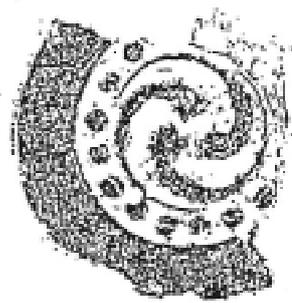
天守閣と共通の特殊な軒平瓦 (金箔)



三巴文の軒丸瓦 (金箔)



桐文軒丸瓦



三巴文の軒丸瓦



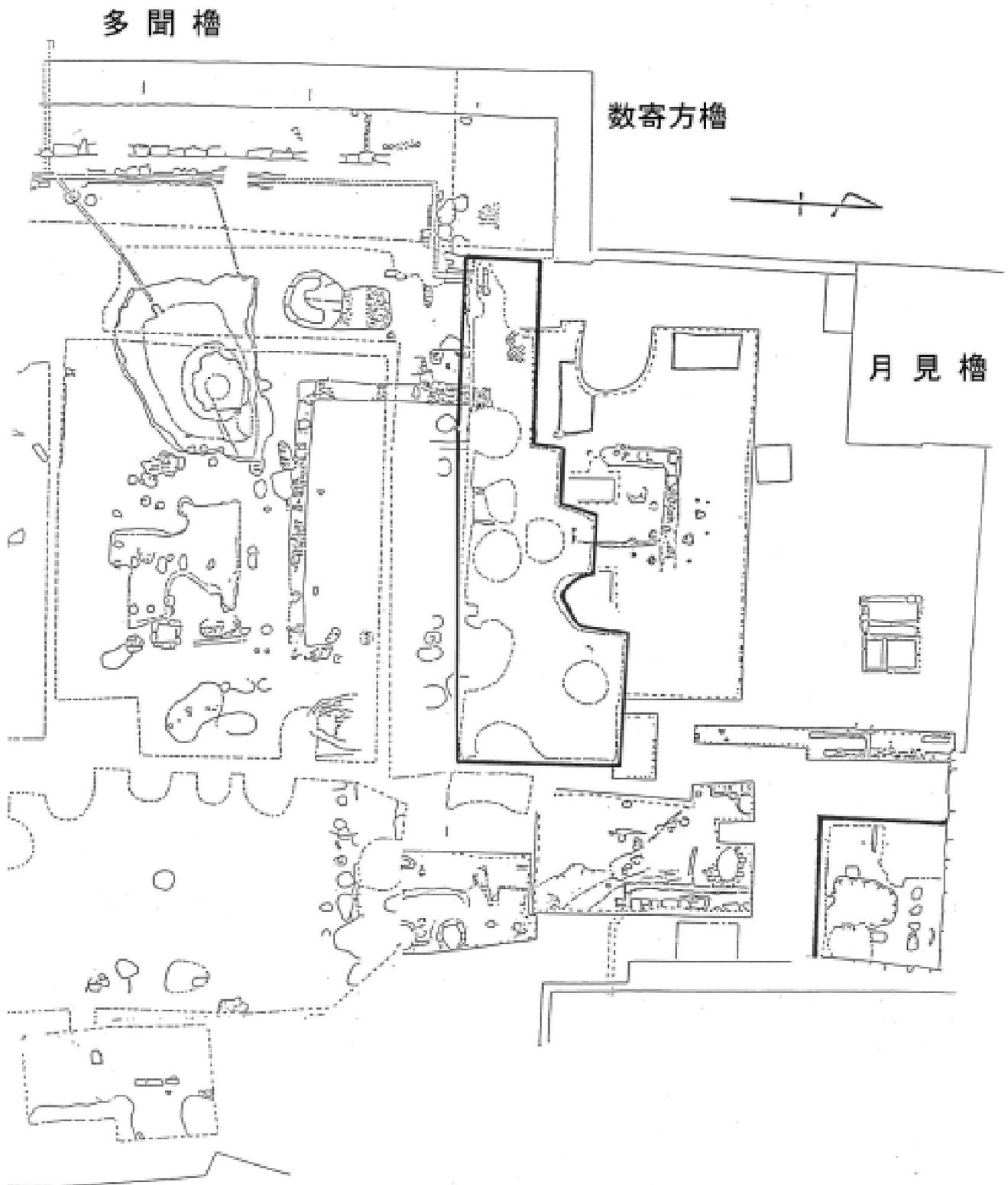
三巴文の軒丸瓦



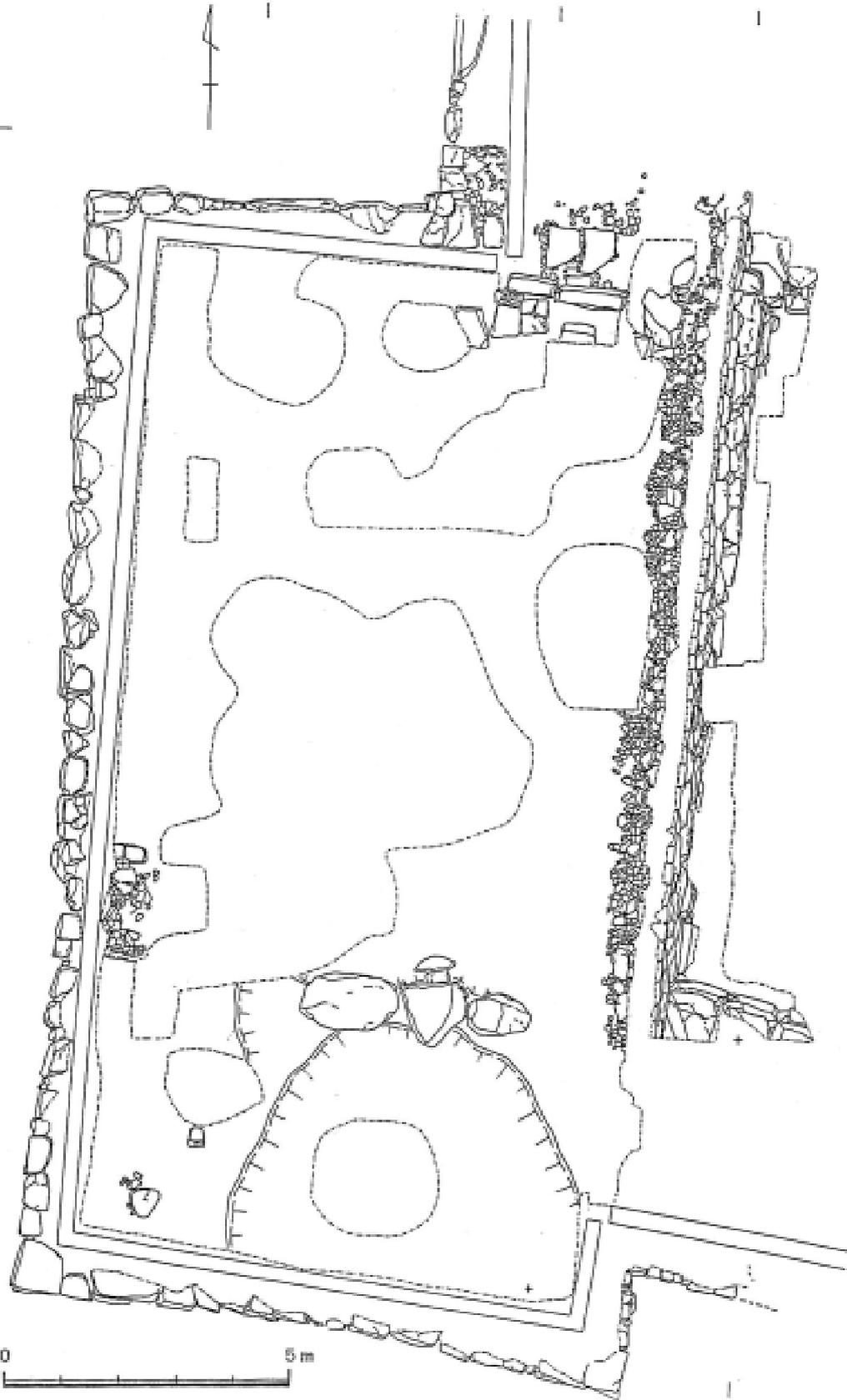
五葉を真ん中に配する軒平瓦



宝珠を真ん中に配する軒平瓦

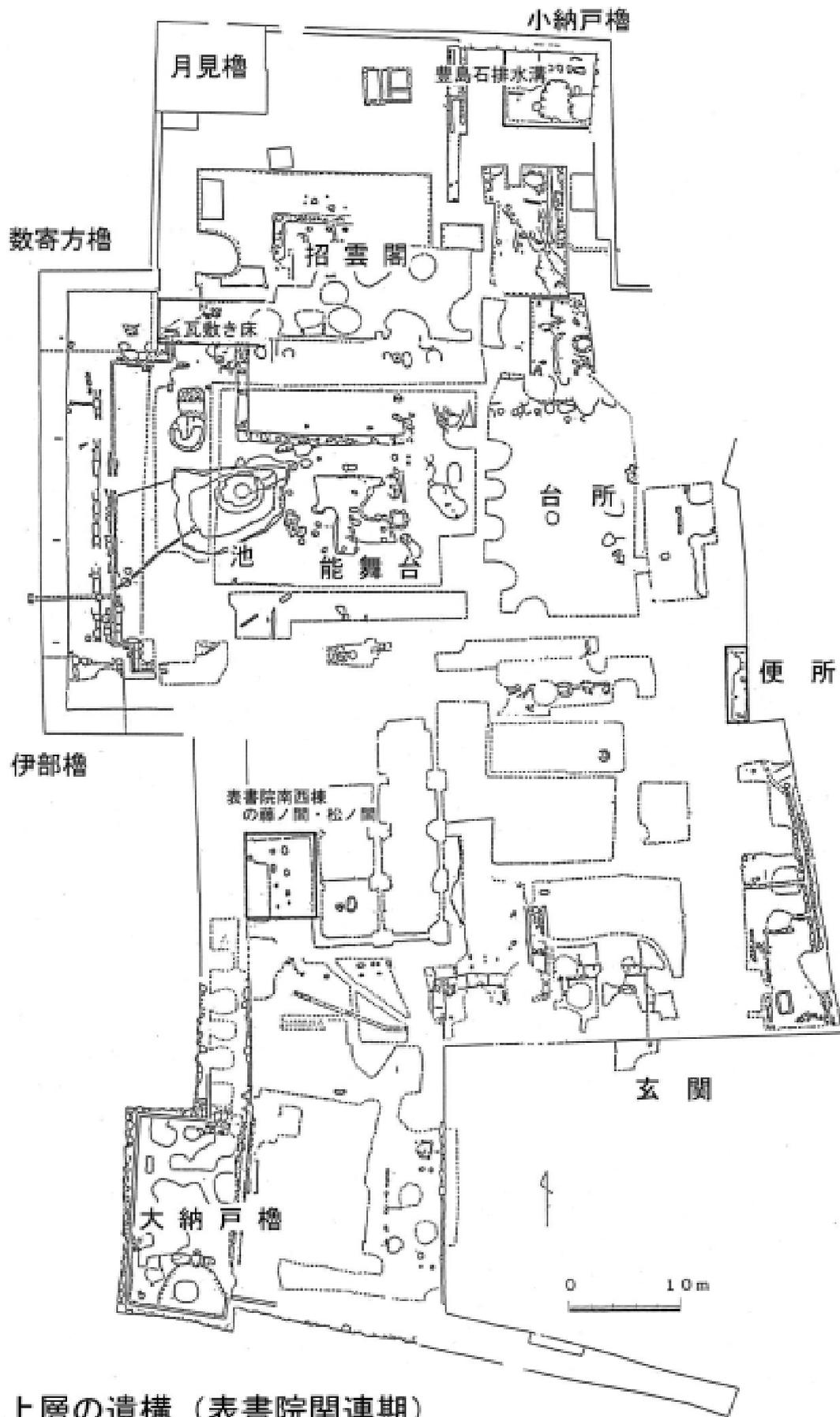


表書院北半部の検出遺構
 (前年度分も総合)



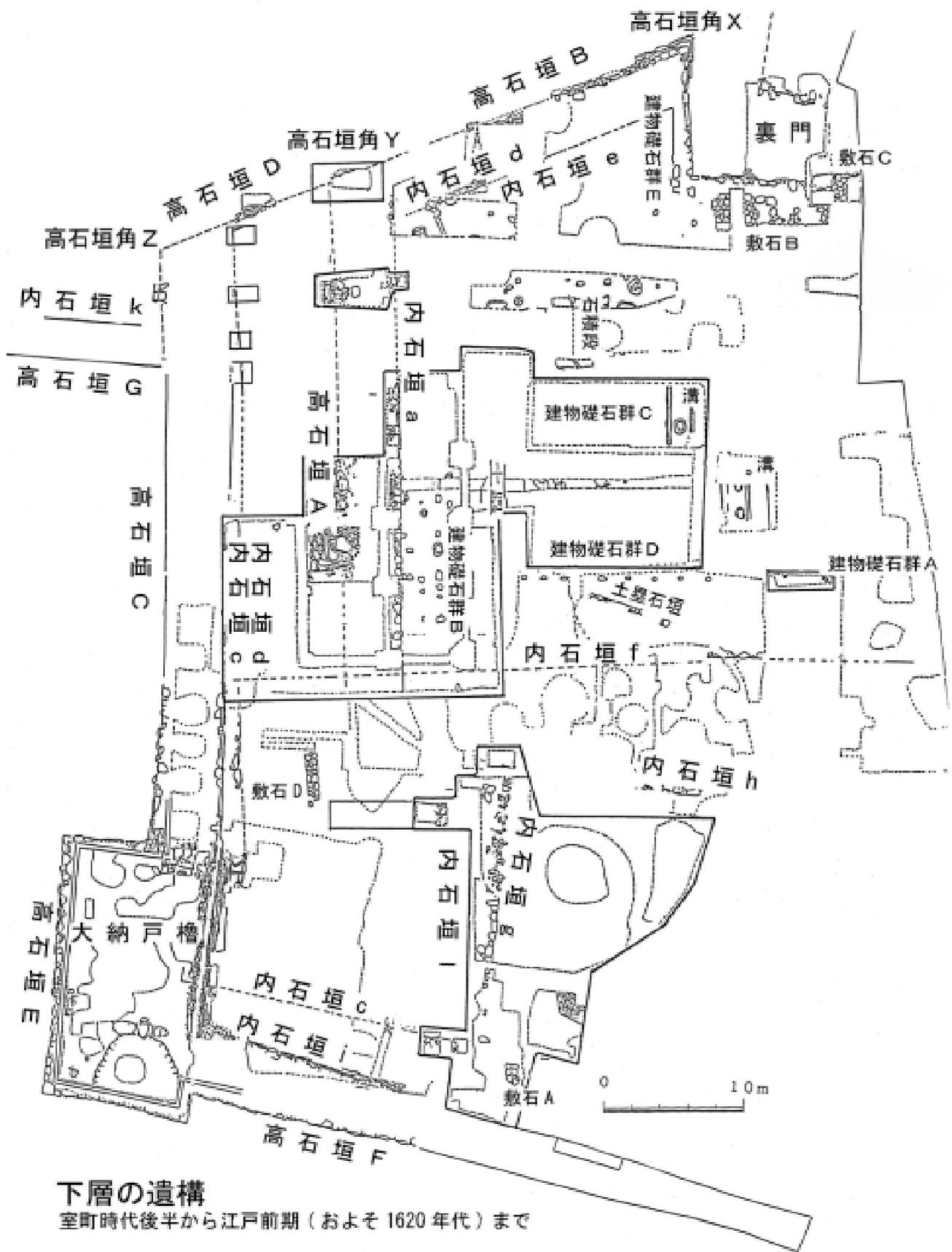
大納戸櫓検出遺構

高石垣部は最上石のみ。『牙城郭櫓実測図』に検出礎石に相当する柱表現あり



上層の遺構（表書院関連期）

江戸前期（およそ1620年代）から（1868年）まで



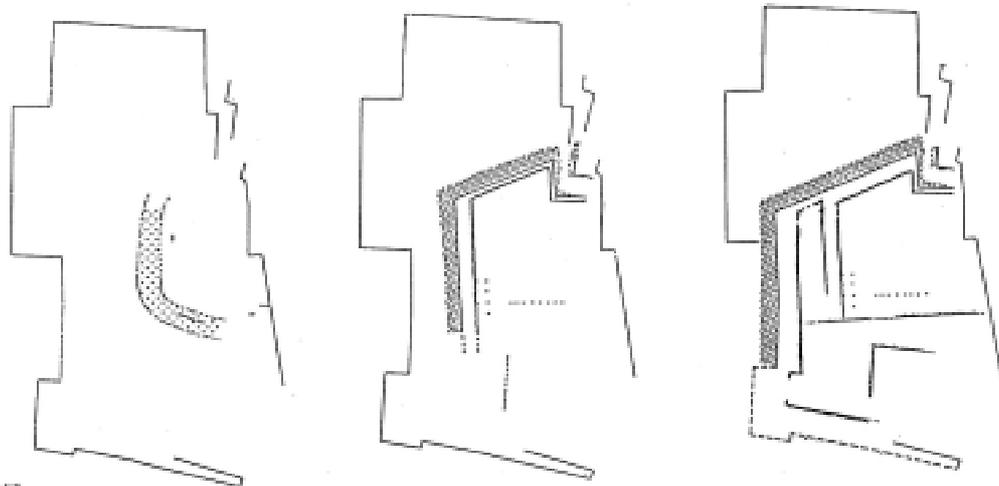
下層の遺構

室町時代後半から江戸前期（およそ 1620 年代）まで

中段の変遷過程

Ⅱ期

1597年かその直後＝宇喜多秀家「築城」期



Ⅰ期

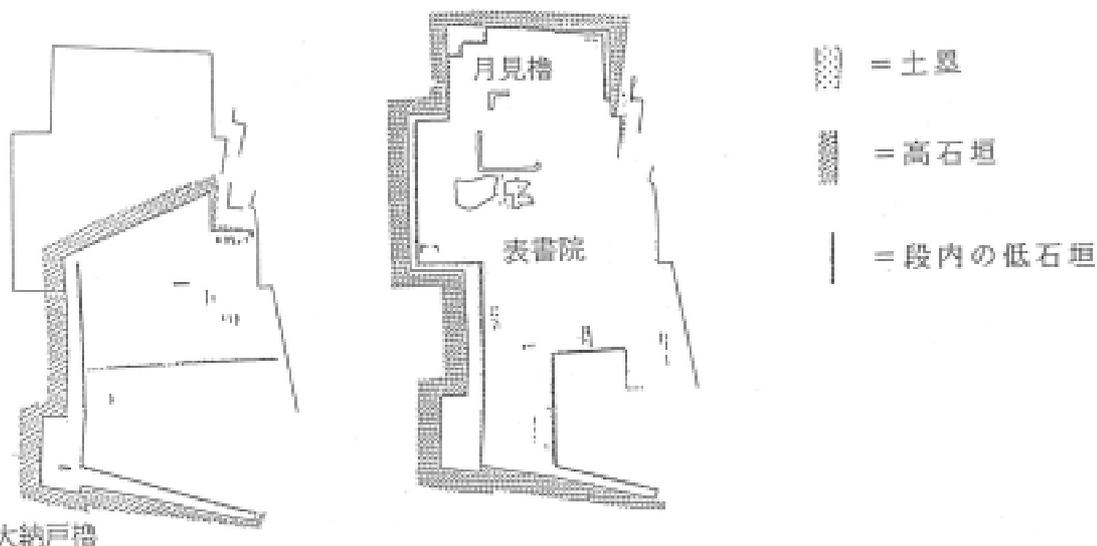
室町時代後半～安土桃山時代＝石山期か

Ⅲ期

1600年前後＝(宇喜多秀家第2期)～小早川秀秋期

Ⅴ期

1620年代後半頃＝池田忠雄期、以降明治(現在)まで



大納戸櫓

Ⅳ期

江戸初期＝(小早川秀秋～)池田利隆ないし池田忠継期か

本図は検出遺構をもとにした模式図で、共存関係など一部に未確定要素を含む。